

前エコチル調査コアセンター長、
現食品安全委員会委員
佐藤洋 先生

おしえて！エコチル先生、今回は、前エコチル調査コアセンター長の佐藤洋先生に、この一年間を振り返っていただきました。

エコチル調査開始から一年を振り返って

エコチル調査（「子どもの健康と環境に関する全国調査」）のリクルート（対象となる妊婦さんに調査への参加を呼びかけること）は、平成23年1月24日に開始されました。それから、もう既に一年あまりが経過しています。その間種々様々なことがありましたが、なんとか無事に進んでいると思っています。とても嬉しく感ずると同時に、関係の皆様感謝しております。

リクルートがはじまったのは平成23年1月でしたが、事業としてスタートしたのは、平成22年4月でした。同年4月12日には、環境大臣の出席をえて、国立環境研究所に設置されたコアセンター、国立成育医療研究センターに設置されたメディカルサポートセンター、15に及ぶ全国各地のユニットセンターの認定書授与式が行われました。その後、各ユニットセンターはセンター自身の体制作りをし、地域の病院・診療所はじめ地方公共団体・医師会などの関連機関などと協議を重ねて来ました。コアセンターでも、リクルートやインフォームドコンセントに必要な書類等の準備を進めたり、試料の回収の方法の確認などを行っていました。その準備の状況をみながら、平成23年1月24日以降、準備の整ったユニットセンターからリクルートをはじめることにしたのです。4つのユニットでその日に、その後1週間程度で残りのユニットほとんどでリクルートのスタートが切られました。開始当日に同意第一号が得られたとの報告がもたらされた時は、大歓声があがりました。

順調に歩み始めたように思われたエコチル調査のリクルートですが、

平成23年3月11日に東日本大震災におそわれました。激しい地震とその後の巨大な津波、そして原子力発電所の事故と立て続けに異変が生まれました。私自身はエコチル調査関連の会議を終えて、東京からその頃住んでいた仙台に帰る東北新幹線の中で被災しました。仙台に戻るまで3日かかりましたが、その話は国環研ニュース(<http://www.nies.go.jp/kanko/news/30/30-3/30-3-01.html>) で読んでいただければと思います。

コアセンターでは、震災後の調査の継続について、全国のユニットセンターに次のような通知をメールで出しました。

エコチル調査に携わる皆様へ

今回の震災で被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます。(中略)
さて、ユニットセンターのスタッフやリサーチコーディネーターの皆様におかれては、このような大災害時に、エコチル調査をどのように遂行すべきか迷いが生じておられるのではないかと想像しております。(中略)そこで、当面、以下の方針でエコチル調査を進められることをお願いしたいと思います。

病院、自治体では被災地への支援のために医療関係者を派遣するなどの活動をされることであろうかと思います。そのような場合には、支援活動に協力することを優先してください。結果として、エコチル調査業務を縮小したり、中断したりすることがあってもやむを得ません。

一方で、今回の震災の発生によって、エコチル調査を実施する意義が失われるわけではまったくありません。次の世代の子ども達が健やかに生活できる環境を残すために、この大きなプロジェクトを成し遂げていくことが私達の使命でもあります。計画停電やガソリンの不足等による業務の混乱もあるかと思いますが、現場の状況に応じ、場合によっては生体試料の採取やリクルートを中断するなどの対応もとりつつ、調査を実施していきたいと思います。(後略)

エコチル調査に関連する人々は、調査の性質上医療関係者が多いので、被災地での医療の支援をまずお願いしました。そして、エコチル調査に多少の遅延や中断が起きてもしかたないことを伝えただけです。幸いなことに、宮城と福島を除くユニットセンターでは、比較的早くリクルートを再開することができました。

宮城ユニットセンターでは、気仙沼市から石巻市にいたる三陸沿岸地方と県南の沿岸部を調査対象地域の一部としていました。福島ユニットセンターは、福島第一原子力発電所に近い、南相馬市から広野町にいたる沿岸部と内陸の葛尾・川内の二村（相双地方）が調査対象地域の一部でした。

宮城ユニットセンターは、地震の被害だけだった内陸部は比較的早く4月の中旬にリクルートを再開できたのですが、津波の被害にもあった沿岸部では8月になるまで再開はできませんでした。しかし、その地域の対象者になり得る妊婦さんからは、こういう時だからこそ、調査を早く再開してほしいとの声が寄せられました。福島ユニットセンターでは、相双地方が避難区域になってしまったために、リクルートが実質的にできない状態になりました。そこで、福島市周辺の一市三町を新たな調査地域として、リクルートを継続しました。そして、避難された方が離れた調査地域でリクルートされたケースもありました。リクルートをはじめめる前から調査について広報活動を行っていましたが、既にエコチル調査の意義を理解し、調査に協力しようと考えていた妊婦さんがいたことがわかりました。大変ありがたいことです。

先月（平成24年5月）、パリでPPTOX-Ⅲという会議が開催されました。PPTOXは、Prenatal Programming and Toxicityと言う国際会議で、第3回目でした。胎児期の化学物質へのばく露が、出生後の健康状態や疾病を決定づけるという仮説をもとに、実際に影響があるのか、そのメカニズムは何かを研究テーマとする会議です。最初のPPTOXは、メチル水銀の胎児期ばく露の出生コホート研究で有名な北海のフェロー諸島で、7年前に開催されました。その時も参加しましたが、今回はフェロー諸島の調査を行い、PPTOXをはじめたデンマークのGrandjean教授からの、震災後のエコチル調査の話をして欲しいとの依頼で出かけました。そこで、「東日本大震災とそれに伴う災害後のエコチル調査、"Japan Environment and Children's Study in the wake of the Great East Japan Earthquake and accompanying disasters"」という題で話をしました。震災や原発事故にも負けないで、4月末までに32,367名の妊婦さんをリクルートすることができ、3年のリクルート期間なので、若干の遅れはあるもののほぼ順調に進捗していることを伝えました。講演後には会議の参加者皆からあたたかい拍手をいただき、Grandjean教授はエコチル調査のチームの震災に負けない強い気持ちをたたえるコメントをくださいました。これまで既に、エ

コチル調査は国際連携活動を行ってきたので、類似の出生コホート調査を行っていたり、それに関心を持っている研究者には知られていました。しかし、PPTOX-Ⅲには、そのような研究者以外にtoxicology（中毒学あるいは毒性学）に関連する研究者がたくさん参加していました。エコチル調査は、それらの人々の間でも広く知られるようになったのです。

PPTOXとその掲げるテーマは、まさにエコチル調査にぴったりのものです。パリの会議では、この国際会議の第4回目を日本で開催することが決まりました。平成26年11月初旬に北九州市で、産業医科大学の川本教授を中心に開催することになっています。会議の開催まで2年あまり、その頃までにリクルートは終了しているはずですが、どこまでデータが出ているかどうか、まだ何ともいえませんが、PPTOX-Ⅳに参加する研究者たちは、期待を持って日本に来ることと思います。なんとか、それまでにいくつかの成果を出していただきたいと考えています。

(2012年6月30日)

■著者プロフィール

食品安全委員会委員

佐藤 洋

【略歴】

1979年 東北大学大学院医学系研究科修了

1989年 東北大学医学部衛生学教室教授

1998年 東北大学大学院医学系社会医学講座環境保健医学分野教授

2011年4月より2012年6月 (独)国立環境研究所理事 エコチル調査コアセンター長

2012年7月より 現職